

# 学位論文要旨

氏名 小林 愛記



論文題目

「脳卒中患者の長期在宅介護における介護負担軽減  
および継続要因の検討」

指導教授承認印

福田 倫也



# 脳卒中患者の長期在宅介護における介護負担軽減

## および継続要因の検討

小林 愛記

### 【目的】

在宅介護における介護者の介護負担は大きいと思われるが、在宅介護を長期に継続できる条件として、介護者が自分の時間を持つこと、被介護者は日常生活活動（ADL）の自立度が高いという2つの仮説を検証するため、介護の現状を調査した。これより、長期在宅介護を継続している介護者の介護負担感の変化についても明らかにし、長期介護が継続できることの要因について検討することを目的とする。

### 【方法】

1993～1997年に急性期脳卒中により入院後、在宅生活を継続している患者52例の主介護者に対し、1999年（前回）と2010年（今回）にアンケート調査を実施した。調査項目は、患者のADL、介護保険サービス利用状況、介護状況、介護負担感であった。

解析は、両調査結果について、ウィルコクソン検定とマクネマー検定、スミルノフ検定を用いて比較した。

### 【結果】

2010年まで長期介護を継続している割合は17.7%と少なかった。患者の平均年齢は69.8歳であった。

患者のADLについて、全般的に自立度は高かった。排泄コントロール、発話、言語理解、行動範囲は前回と比して有意に悪化したが、移動、トイレ動作、食事、更衣動作、入浴では差は見られなかった。

介護が必要な患者は23.1%から42.0%と有意に増加したが、介護サービス利用の差は見られず、少なかった。

主介護者は患者と共に高齢となった配偶者が61.5%で最も多かった。両調査間における主介護者の交代は稀であった。

1日の介護時間は前回と変わらず3時間以下が6割以上と短かった。介護者の介護負担感については、前回より今回のほうが自身の健康面への影響が大きいと感じていた。また、家事や仕事への影響も大きいと感じていたが、影響が全くないという介護者が増加した。外出や自由時間の制限、精神面への影響、睡眠制限といった介護負担

も感じていたが、前回と差は見られなかった。また、家族関係の悪化を感じている介護者は少ないことにも変わりはない。

### 【考察】

前回の調査から10年以上にわたる長期介護継続の割合は少ないと言える。前回のADL自立度が全般的には高いにも関わらず、在宅介護継続が難しい割合が多いことから、ADL自立度の高さが必ずしも在宅介護が継続できる要因になるとは限らないと示唆された。さらに、患者のADLについて前回調査と比較すると、セルフケアの自立度は悪化していなかったことから、これにより長期介護が継続できているとも考えられる。一方、排泄コントロール、発話、言語理解、行動範囲は悪化していた。発話や言語理解の悪化により長期介護が困難になったとも考えられ、コミュニケーション能力を下げないような支援が重要と思われる。

介助を要する患者は前回調査時より有意に増加したが、当初より介助を要する患者ばかりではなく、長期の在宅生活において何らかの低下をきたし、介助を要するようになった患者が半数であった。しかし、介護サービスについては、2000年に介護保険制度が導入されたにも関わらず利用は少なかった。

主たる介護者は配偶者が多いことにも変わりはない。さらに、前回からの主介護者の交代は少なく、同じ介護者が長期にわたり介護をしているという現実が明らかになった。同居家族が少なく介護サービスの利用も少ないことから、他人の手を借りずに介護をしている可能性も明らかになった。また、患者も介護者も高齢者が多く、共に加齢していくことから、患者のみならず介護者への心身面の配慮の必要性が高いと言える。そのため、社会との接点を持てるような地域づくり、さらには「地域包括ケアシステム」の活用促進といった介入により、地域で在宅生活を支えていく必要があると考える。

介護者の1日に占める介護時間の割合は比較的短かった。そのため、介護者自身の時間を持っていることが容易に想像でき、これにより長期介護が継続できていると思われる。

介護負担感に変化が見られた項目は、健康面と家事・仕事への影響であった。健康面については、長期にわたる介護疲れや高齢化による身体機能の低下を自覚しているためと思われる。家事・仕事への影響について、全くないと感じている介護者が増加したことは、介護も家事のように生活の一部となってきたことの表れと考える。介護者の生活パターンにも変化が見られ、介護が生活に定着している例が増えることは望ましい。これ以外の介護負担感の項目については前回と変わらず、介護者は大きな負担を感じていると言える。しかし、家族関係は保たれており、これが長期介護を

継続するために重要だと考える。

**【結語】**

患者の ADL 自立度が高くても，介護者の介護負担は大きかった．この介護負担を軽減するためには，介護者の介護時間を短くし，介護者自身の時間を確保する必要がある．さらに，家族関係を維持することにより，在宅介護を長期に継続することができる．